

支所だより

東予・丹原・小松の各総合支所管内での、身近な出来事や話題などを紹介するコーナーです。

東予総合支所

〒799-1394 周布349番地1 TEL0898-64-2700 FAX0898-65-4363

郷土の偉人を称える私設郷土館

～ 地元の近代史にゆかりの長屋門を活用 ～

国道196号を折れ堀川沿いに壬生川港へ向かう道筋に、現在は私設郷土館となった2階建ての長屋門があります。かつて江戸時代には、松山藩の年貢米の海上輸送拠点として賑わった壬生川港でしたが、汽船が帆船にとって代わると、遠浅海岸のため満潮時しか大型船が寄港できない壬生川港への定期航路開設は難しい状況となっていました。そうしたなか、当時の壬生川町長であった一色耕平氏の誘致活動により、沖合に停泊した汽船と港を繋（はな）いで連絡する定期寄港が明治35年によく実現しました。さらに一色町長は、この地で石炭商を興していた吉本米蔵氏に、龍宮城のようなまちのシンボリックの建造物の建設を依頼。これを受け大正15年に、周囲には平屋の民家しかない

堀川沿いに、伝統的な武家屋敷の門造り様式にのっとった2階建ての長屋門という画期的な建物が完成したのです。

その米蔵氏の孫で、長屋門を現在管理している吉本アイコさんは語ります。「この門が過ぎた時と同じ時代に、



貴重な歴史資料を収集展示している長屋門とその内部

幾多の困難を克服し事を成した郷土の偉人たち。四阪島煙害問題の解決にも尽力した一色耕平氏、周布村長として村の発展に寄与し真言宗醍醐派管長まで務めた細川英道氏、茶葉製品・緑茶飲料最大手「伊藤園」創業者の本庄正則氏など、偉大な先人が遺した掛け軸や写真等の資料を収集してこの長屋門に展示することで、どちらも長く後世に伝えていきたい」と。

丹原総合支所

〒791-0592 丹原町池田1733番地1 TEL0898-68-7300 FAX0898-68-4769

人気を集める温かみある木工製品

～ 丹原地区老人クラブ連合会木工クラブ ～

丹原町米消費拡大推進連絡協議会の主催により、毎年12月初旬の日曜日に開催される「丹原町産業まつり」。その会場でいつも人気を集めているのが、手づくりの温かみを感じる木工製品の展示即売です。

実はそこで販売されている品物の数々、丹原地区老人クラブ連合会の木工クラブ(渡部信会長代行・16人)の皆さんによって、一つひとつ丹精を込めてつくられたものなのです。毎週月・水・金曜日の午前中、丹原農村環境改善センターの木工室では、クラブ員の皆さんが杉やヒノキ・ブナ・ケヤキ・モ

ミの木など、それぞれの木材がもつ特性を活かしつつ、多様化した日常生活にどのようにマッチさせるかアイデアを出し合いながら、製品の創作活動に取り組んでいます。

今年の産業まつり(12月2日開催)にも、郵便箱や玩具・押し入れ用すのこ・食パンを切るボード・核家族向けの小さめの2段もろ蓋・野趣を感じる花台・半畳ほどのスペースがあれば運動不足を解消できる健康用踏み台など、創意工夫を重ねて製作した約150点を出品し、皆さんのお越しをお待ちしています。また当日は、古い農機具の木材部分の修理や家の玄関の高さに応じた踏み台・身体に合わせたベッド・太刀魚専用の細長いまな板など、1点物のご注文も受け付けていますので、ぜひお気軽にご相談ください。産業まつりの展示即売は大盛況!



産業まつりの展示即売は大盛況!

小松総合支所

〒799-1198 小松町新屋敷甲496番地 TEL0898-72-2111 FAX0898-72-4048

正岡子規の短歌唯一の同郷門弟

～ 郷土を愛した歌人 森田義郎 ～

正岡子規の数少ない短歌の門弟に、小松町出身の歌人がいたことをご存知でしょうか。その名を森田義郎と言い、歌は万葉調で恋歌・時事歌に優れていました。

明治14年、小松町新屋敷に生まれた義郎は、松山中学校時代に子規の影響で文学に目覚め、明治33年、20歳の時に上京して子規の門を叩きます。

子規は、高浜虚子や河東碧梧桐をはじめ俳句では同郷の門弟に恵まれていましたが、短歌において同郷は義郎だけで、それだけに義郎に寄せる期待には大きなものがありました。しかし、当時既に寝たきりであった子規の体調



号を石鉄山人と称した義郎

は徐々に悪化し、二人の師弟関係は子規が亡くなるまでのわずか2年2カ月ほどの間でした。ある日、子規の看護当番を務めた義郎は、苦痛を少しでも和らげようと故郷に伝わる「たのもさん」を作って見せたところ、大変喜ばれたというエピソードも残っています。

子規の没後、次第に政治活動に傾倒しあまり表に出ることのなくなった義郎は、その一途で無骨な性格と酒が好きであったため、晩年は流浪に近い孤独な生活を送り、60年の人生に幕を閉じています。

生涯に多くの歌を詠んだ義郎ですが歌集はなく、甥に当たる玉置富次郎が編集した「森田義郎歌稿」が、小松温芳図書館に残るだけです。故郷を愛し、波乱の人生を歩んだ知られざる歌人・森田義郎。代表作は52歳の時に発表した「石鉄(石鎚)百首」。その中の一首を紹介します。「われも亦伊予の孤児いしづちと燧の波に恋知りそめて」